
【特集：『意味の論理学』を本質変形する】

動詞的になること

——『意味の論理学』におけるアイオーンの現在にかんする文法論的考察

平田 公威

はじめに

ドゥルーズの『意味の論理学』は、その表題のとおり「意味」について論究する書物であり、その主軸をなすのは、物体と非物体的なものの二元論である。この二元論は、ストア哲学にもとづくものであり、意味は、非物体的なもののうちに数え入れられつつ、出来事や幻影などさまざまな概念とともに論じられている。しかしながら、私たち自身は物体であり、物体だけが実在的であるとするストア哲学にならい、ドゥルーズもまた、非物体的なものだけを取りだし、そこに身を置くようなことはしない。あくまでも、物体の側に視座を置いたうえで、非物体的なものへの思考に乗りだすのである。そこで、非物体的なものの物体への実現が論じられるのだが、それだけでなく、純粋に非物体的なものの思考も展開されている。これは、物体の側から、純粋に非物体的なものを思考するという困難な試みである⁽¹⁾。

この論文では、こうした試みのなかで論じられる、アイオンとよきクロノスという異質な二つの時間に着目したい。端的に言えば、これらの時間は、純粋に非物体的な時間と、物的になった非物体的な時間である。ドゥルーズは、これら二つの時間にそれぞれ不定法と（直説法）現在形という文法モデルを与え、それらの両立不可能性を論じているのだが、それにもかかわらず、アイオンに属する第三の現在があるという。本稿では、アイオンとよきクロノスに文法的なモデルが与えられているように、この第三の現在にも対応するモデルがあると考え、文法論的な考察を試みる。結論から言えば、複合過去こそが第三の現在に相当するモデルであり、この時制において異質な二つの時間が複合されていることを示す。これにあたり、まずは、ストア哲学の二元論と時間の関係について確認し、ついで、時制が表わす時間への文法論的な考察を介したうえで、複合過去への分析を行いたい。

1. 物体と非物体的なもの、三つの時間について

ストア哲学では、原因になりうるものが物体として定義され、唯物論的な思考が展開されているのだが、その一方で、原因から

派生するが新たな原因になることのない結果＝効果（effet）として非物体的なものが論じられている⁽²⁾。たとえば、ある物体が原因となって私に作用するとき、私の精神のうちに、「カトーが歩く（Kato marche）」といったかたちでの認識が形成される。眼前の物体は、「歩く（marche）」という動詞により分節されることで認識されるのだが、この認識それ自体が原因となって物的に作用することはない。ここに、新たな原因になることのない結果＝効果として、非物体的なものが認められるのである。

こうしたストア派の二元論にならい、『意味の論理学』では、物体の運動と、非物体的なものの関係が論じられているのだが、ドゥルーズは、この関係を時間論として整理している。先ほどの「カトーが歩く（Kato marche）」という例で言えば、直説法現在形の動詞「歩く（marche）」は、物体の運動をひとつの行為として測定し、実際にその運動が継続する時間を表わす（cf. LS 190/上 283-284）。この「歩く（marche）」がなければ、近い過去と近い未来からなるまとまった時間、すなわち「時期（moment）」が形成されることはなく、ただ物的運動が次の原因へ次の原因へと送り返されるのみであり、その都度、「今（maintenant）」として示されるしかない「狂気-生成」があるのみである（LS 192/上 285-286）。『意味の論理学』では、こうした「測度＝節度（mesure）」をもたない時間が「悪しきクロノス」と呼ばれ、現在形の動詞により限定される時間が「よきクロノス」と呼ばれる。

これら二つの時間は、いわば、物的でしかない時間と、非物的に分節された物的な時間であるが、どちらも実在的な時間であるために現在と呼ばれている。これらに加えて、ドゥルーズは、「アイオン」と呼ばれる純粋に非物体的な時間を提示している。この時間は、「時間の空虚な純粋形式」（LS 194/上 288）と形容され、物体の運動に還元されることがなく、不定法の動詞によって表されるという。たとえば、「歩くこと（marcher）」は、純粋に観念的なものを表わしており、それを物的に捉えることはできない⁽³⁾。「歩くこと（marcher）」は、カトーの歩きや猫の

歩きといった実現の水準にある物体の運動とは本性を異にする何かを表わすのである。要するに、アイオンという時間は、非物体的なものであるために、現在形の動詞で表象されるよきクロノスとは同一視されず、不定法のようなかたちで表わされるのである。ドゥルーズは、よきクロノスとアイオンにかかわる認識の様態を区別して、同定作用としての「表象」と、同定不可能なものにかかわる「表現」に整理している (cf. LS 170/上 252)。「カトーが歩く (Kato marche)」という現在形の表象は、物体的に同定可能な対象にかかわっており、「歩くこと (marcher)」という不定法の表現は、そのように同定されることがない非物体的な何かを表わすというのである。

このように、アイオンとは、決して現在にならない純粋に非物体的なものである。しかしながら、ドゥルーズはアイオンに属する現在があると論じる。

クロノスの二つの現在、根底からの転覆の現在〔悪しきクロノス〕と形態への実現の現在〔よきクロノス〕のあいだに、第三の現在があるし、アイオンに属する第三の現在があるはずである。(LS 196/上 292)

この引用に続く箇所では、表現そのものと表象の本性的差異が指摘されながらも、「〔……〕表象はその縁で表現を包むことができる〔……〕」(LS 196/上 292)とも述べられている。現在化されるはずのないアイオンに属する現在や、異質であるはずの表現を表象が含むことなど、きわめて興味深い論点が提示されているのだが、ドゥルーズはその内実をあまり明らかにしてはいない。そこで、以下では、よきクロノスとアイオンが現在形と不定法という文法的なモデルによって説明されるように、第三の現在にも対応するモデルがあるとして考察を進たい。具体的には、ドゥルーズが第 22 セリーで取り上げている複合過去に、第三の現在が見いだせることを示す。すなわち、複合過去が、現在化されることのない非物体的な時間の表現としての過去分詞を要素にもつ、特殊な現在形であると論じる。しかしながら、ドゥルーズは、アイオンを表わす時制としては不定法に言及するばかりで、過去分詞にはほとんど言及していない。そのため、ドゥルーズが動詞の活用を論じるにあたって依拠している言語学者、ギュスターヴ・ギヨームの言語論を糸口として、複合過去への検討に入りたい⁽⁴⁾。次節では、この言語学者があまり知られていないこともあるため、その言語論を概略する。

2. 時間発生論について

ギュスターヴ・ギヨーム (1883-1960) は、言語の潜在的状態

から現働的な「語り (discours)」への移行に着目しており、その独特な文法理論では、実際の言語運用にあたっての話者の心的運動が記述されている。ギヨームによると、語はラングのままでは、いかなる品詞ももたないため、語りに入るためには、他の語と統合されつつ、特定の品詞を担わなければならない。そこでギヨームは、「活用」(conjugaison) という操作によって、話者が語に対して特定の品詞を与え、言語の潜在的な状態からの現働化がなされると考えており、とくに、語を動詞にする操作では、時間のイメージが付加されると論じている⁽⁵⁾。たとえばフランス語では、活用により付加される屈折語尾が、語に付加される時間に相当すると考えられている。そのため、形態論的分析は、言語操作により発生する時間のイメージを明らかにするとみなされるのである。

ギヨームによると、動詞の活用による時間イメージの発生、すなわち「時間発生 (chronogenèse)」には進度があり、これは話者の心的運動の時間の長さ に比例する。ギヨームは、この時間発生 の段階に対応させて、フランス語動詞における「時制」を三つの叙法に分類している。その分類によると、操作時間の短い順(つまり時間発生が進んでいない順)に、「準名詞的叙法 (mode quasi-nominal)」(不定法、現在分詞、過去分詞が含まれる)、「接続法 (mode subjonctif)」(接続法現在、接続法半過去)、「直説法 (mode indicatif)」(直説法現在形、単純未来、仮定的未来(いわゆる条件法)、単純過去、半過去)と分類される。このうち、時間発生 の最終段階に位置づけられる直説法において、時間のイメージは最も完成しており、この叙法だけが、実在的な現在という「時 (époque)」をもち、その現在をもとに形成される過去と未来という時もそなえている。ギヨームは、このような完成された時間イメージにもとづいて、各々の時制を説明するのではなく、それに至る時間イメージの発生を説明しようと試みている。

まず、準名詞的叙法の不定法であるが、これは、完了されていない過程(行為や状態変化)を表し、純粋な過程の「遂行 (accomplissement)」を表す。ここでは、過程の遂行は来たるべきものにとどまっており、過程の展開は開始されないままに表される。第二に、現在分詞においては、過程の展開はすでに開始しており、その完了は見込まれているが、その過程にはいまだ残りがあ るものとして表される(展開される行為や状態変化がイメージとして残っている)。そのため、過程の遂行と完了への見通しがともに表わされている。第三に、過去分詞は、過程の純粋な「完了 (accompli)」を表し、過程の展開が終わったもの、完了しきったものを表わす⁽⁶⁾。特に、過去分詞には遂行のイメージが全く残されていないため、ここから新たなイメージを引き出すことはできないとされる(以上、図 1 参照)。

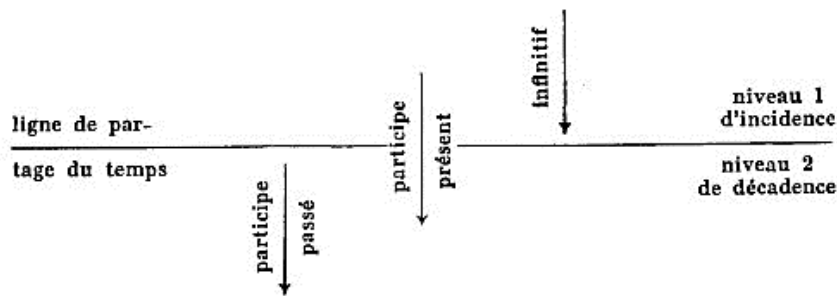


図1 (Époques, p. 255)

ギヨームによると、準名詞的叙法は、直説法現在形や半過去などの時制が表わす「時」に無関心であり、時としての資格をそなえていない。実際にフランス語では、不定法、現在分詞、過去分詞が他の時制に後続して用いられるが、これは準名詞的叙法が各々の時に無関心な過程を表わすためである⁽⁷⁾。つまり、この叙法で問題になっているのは、過程の遂行や完了にかかわるイメージだけなのである。とくに、不定法では、遂行ははじまってさえおらず、また、過去分詞にいたっては、動詞的な質が尽きてしまっているため、動詞としては「死んでいる」⁽⁸⁾とさえ言われる。また、現在分詞は、過程の遂行と完了の見通しをともに表わすのだが、人称が挿入されていないため、いかなる動作主もたず、いかなる具体的な表象も与えないのである。

次の叙法は、接続法（接続法現在、接続法半過去）である。ここでは、準名詞的叙法よりも時間発生が進んでおり、人称が挿入されることで、より具体的な仕方で過程が表わされている⁽⁹⁾。しかしながら、ここにもまだ「実在性 (réalité)」がないため、叙法

としては可能な過程を表象するにとどまっており、現在という実在的な時により区別される未来と過去という時も発生していない。この叙法では、準名詞的叙法で生じた二つの水準に親和的な、二つの時間の方向性（いわゆる未来と過去の方向）だけが表されるにとどまっている。すなわち、この叙法で生じるのは、「到来しつつあるが、まだ来てはいない (arrivant, non encore venu)」という到来が仮定されるものへ向かう「上昇する方向 (sens ascendant)」と「過ぎ去ってしまった s'en est allé」という実在的なものへ向かう「下降する方向 (sens descendant)」なのである⁽¹⁰⁾。このように、接続法では、これから到来するかもしれない可能的な行為（「彼が明日来るとは思わない Je doute qu'il vienne demain」⁽¹¹⁾）と可能であったかもしれない行為（「彼は私が M と知り合いになることを望んでいたのではなかったか N'avait-il pas voulu que je connusse Marthe」⁽¹²⁾）だけが表されるのである（以上、図2参照）。

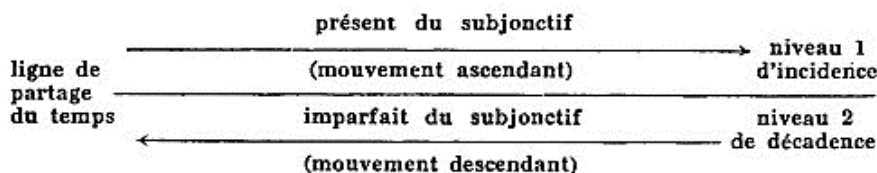


図2 (Époques, p. 264)

最後の叙法は直説法である。この叙法で、はじめて、現在という実在的で限定された時が挿入される。この現在は、その「位置 (position)」によって、直線的な時間のイメージを未来と過去という時に分割するのだが、そのさい、接続法で発生した二つの方向性が反映されている。また、ここで重要なのは、現在が、未来と過去の「小部分 (parcelles)」を要素としてもつという「構成 (composition)」の側面からも論じられていることである⁽¹³⁾。ギヨームの考えでは、現在とは、直線を区切る点のようなものではなく、未来寄りの現在 (クロノタイプ α) と過去寄りの現在 (クロノタイプ ω) という二つの水準をもつのである。この二つの水準は、準名詞的叙法から引き継がれたものである⁽¹⁴⁾。ギヨーム

によると、現在を位置と構成から捉えることで、未来と過去という時を表す時制がフランス語にはそれぞれ二つあるという事実を説明できるという⁽¹⁵⁾。すなわち、現在の位置により、直線的な時間が未来と過去という時に分割され、さらに、現在の二つの水準に応じて、各々の時が二通りの仕方で表されるのである（以上、図3参照）。たとえば、未来に近い現在からは単純過去が得られ、過去に近い現在からは半過去が得られる。未来に近い現在から構成される単純過去は、過去に本来的な実在性を表わすのだが、ここでは、ただ起こったという事実それだけ（遂行の実在性）が表わされる。これに対して、過去に近い現在からは、完了したことの実在性が表わされるのだが、ここでは、より実在性の増した

過去が表わされるのである（以上、図3参照）⁽¹⁶⁾。

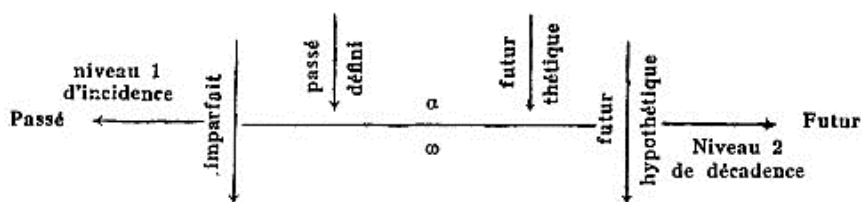


図3 (Époques, p. 267)

時間発生の進展は、おおよそこのようにまとめられるのだが、本稿の関心にしたがって言えば、このうち、準名詞的叙法は、ドゥルーズの言うアイオンに対応すると考えられる。すでに述べたように、この叙法に属する時制はいかなる人称ももたないため、主語となる物体の運動によっては表象不可能な過程が表わされる。ギヨーム自身が準名詞的叙法を「非人称的」⁽¹⁷⁾と形容しているのだが、そのことを文字通りに理解するならば、この叙法の時制（不定法、現在分詞、そして過去分詞）は、アイオンのように、物的な仕方では表象されることのない時間を表現するのである。とりわけ、不定法は、遂行以前の過程を表わすとされるため、動詞としての質を完全に保ったままであり、時間イメージの母胎とみなしうる。このことが理由で、ドゥルーズは不定法を特権視しているようにも思われる。とは言え、本稿にとって重要であるのは、過去分詞が、物的には表象不可能な完了そのものを表わすということと、それが、直説法に属する過去という時とは全く異なっているということである。次節では、『意味の論理学』における複合過去の分析を考察するが、そこで問題になるのもまさにこれらの点である。

3. 複合過去としてのアイオンの現在について

それでは、ドゥルーズは複合過去をどのように記述しているのだろうか。ドゥルーズは、当該のテキストにおいて、フィッツジェラルドやラウリーのアルコリズムを取り上げているのだが、それを物理的原因に起因する依存症とはみなさずに、次のように述べている。

アルコリズムは、快楽を探求しているのではなく、効果を探求しているように見える。その効果は、主として、現在が異常に硬化することである。だから、同時に二つの時間に生き、同時に二つの時期に生きることになる。{……} 同時的な二つの時期は、奇妙な仕方では複合される。すなわち、アルコール飲みは、半過去や未来を生きるのではなく、複合過去しか持たないのである。ただし、極めて特殊な複合過去である、

アルコール飲みは、酔いを材料にして、想像的な過去を複合する。まるで、柔らかな過去分詞が、固い助動詞現在形に結合しに来たかのように。私はもっている-愛したことを [J'ai-aime]、私はもっている-行なったことを [J'ai-fait]、私はもっている-見たことを [J'ai-vu]。(LS 184-185/上 274-275)

ドゥルーズは、作家フィッツジェラルドのアルコリズムが、非物的な結果=効果の探求であると捉え、アルコール飲みの実践を複合過去のモデルによって説明している。すなわち、アルコール飲みが酒を飲むのは、現に「飲んでいる ((Je) bois)」という状態に入るためではなく、「飲んだこと (bu)」という結果=効果を得るためだというのである。ドゥルーズにしたがえば、複合過去「私はもっている-飲んだことを (J'ai-bu)」が表わすのは、現在まさに飲んでいることでも、かつて飲んでいたことでもない。いくら飲もうとも「飲んだこと (bu)」は実現せず、「飲んでいる ((Je) bois)」という現在が「飲んでいた ((Je) buvais)」という古い現在になってしまうだけである。だからこそ、アルコール飲みは、かろうじて、その結果=効果を現在においてもつことしかできないのである。しかしながら、この試みも一時的な成果を収めることしかできず、たちまち、この結果=効果の時期としての現在それ自体が過ぎ去ってしまう。アルコール飲みが取り組んでいるのは、決して現在になることのない時間を生きるという困難な探求なのである。

こうしたドゥルーズによる分析は、明らかに、前節で確認したギヨームの時間発生論と論点を同じくしている⁽¹⁸⁾。すなわち、過去分詞は、半過去や単純過去のような時制とは全く異なる時間を表わしているのである。そして、本稿にとって重要なのは、現在になることのない過去分詞の時間が、助動詞の現在形と両立可能なものとして提示されていることにある。つまり、複合過去の形成において、アイオンの時間に属する現在が見いだせるのである。しかしながら、ドゥルーズは、複合過去の形成という文法的操作についての考察や、第三の現在の文法的なモデルを明示し

てはいない。そこで、ギョームの時間発生論を参照しつつ、アイオンの現在について文法的に考察しよう。

ギョームは、過去分詞を用いて形成される複合過去を、過去時制のひとつに数える伝統的な解釈に反対し、独自の解釈を提示している。すでに論じたように、時間発生論では、過去分詞は、過去という時ではなく、「完了したこと」という「相 (aspect)」を表わすと考えられている⁽¹⁹⁾。したがって、そのような過去分詞を用いる複合過去も、過去という時を表わさずに、ただ相としての完了を表わす現在形のひとつとみなされるのである。

重要な論点であるため敷衍しておこう。すでにみたとおり、準名詞的叙法に属する過去分詞は、純粹に行為の結果=効果を表わすだけであり、そこから過程のイメージを引き出すことができない⁽²⁰⁾。たとえば、「歩くこと (marcher)」の直説法半過去「私は歩いていた (Je marchais)」が、過去という時を表わすのに対して、「歩いたこと (marché)」は、すでに完了してしまったということのみを表わしている。複合過去は、かつて実在した行為を表わすのではなく、過ぎ去ってしまったという観念、「歩くこと (marcher)」の「観念的な帰結」⁽²¹⁾を表わすのである。このように、過去分詞には動詞としての質が残されていないため、これを動詞として用いるためには、その質を回復させる必要がある。そこで、過去分詞に、新たな動詞を付け加えるという操作がなされる。つまり、「もつこと-歩いたことを (avoir-marché)」というひとつの動詞が作られるのであり、その動詞が直説法現在形として活用されることになる。そのため、ギョームにしたがえば、複合過去は、「操作的に (opérativement)」現在に属しながらも、「結果的に=結果相として (résultativement)」過去を表現する時制なのである⁽²²⁾。

おそらく、ギョーム自身は複合過去を素朴に理解しているのだが、時間発生論では、過去分詞が特定の過去を表わさずに、完了そのものを表わすと理解されるため、そのままドゥルーズの記述と接続可能である。すなわち、複合過去とは、現在になることのない空虚で形式的な過去を、現在において表現しているのである。まさしく、操作のうえで、現在に属する複合過去は、ドゥルーズが言うところの、第三の現在としてのアイオンに相応しいだろう。

さらに着目したいのは、複合過去の形成にあたり、操作上、付加される動詞の形式性である。この動詞「もつこと (avoir)」のおかげで、現在化されることのない純粹に観念的な過去が表わされるわけだが、この動詞は、決して「私はリンゴを持っている (J'ai une pomme)」のような具体的な過程、動作を表象するものではない。つまり、かりに複合過去を形成する「もつこと (avoir)」がそれだけで実現されることがあったとしても、それは、物体的

に表象されることがなく、動詞を測度としてもつような現在、出来事の実現の時期としてのよきクロノスとは異なるであろう。あくまでも、「もつこと (avoir)」とは、操作上、形式的に必要とされるに過ぎず、動詞としては無-意味なのである (悪しきクロノスのような無意味ではなく、表現性をもつかぎり) ⁽²³⁾。このことは、たとえば、役者やパントマイム師にとっての動詞「演じること (représenter)」が、たとえ実現されようとも、具体的な事物の状態には無関心であることと等しいだろう。複合過去の形成にあたって、アイオンの時間の表現を可能にするまでに、動詞は抽象化され、形式化されるのである

そうであるからには、複合過去の形成という文法的操作は、その主語である「私 (Je)」もまた、特定の動作主のままにはしておかないだろう。つまり、「私 (Je)」は、出来事を実現している事物の状態として同定されるものではなくなるのである。というのも、過去分詞とそれに付け加えられる動詞は、どちらも特定の過程を表わすことがないためである。たとえば、「飲んだこと (bu)」の主語となる「私 (Je)」とは、「酩酊している ((Je) m'enivre)」ところの「私」とは区別されるべきである。もちろん、前者の表現的な「私」は、現に「酩酊している」私として表象され、特定の事物の状態と同一視されてしまう可能性はある (「はじめに」で述べたように、私たちはあくまでも物体でしかない)。しかしながら、複合過去における「私」とは、物體的な動作者には還元されないのである。準名詞的叙法の非人称的な時間を表わす「私 (Je)」は、接続法や直説法のように具体的な過程の表象を可能にする人称とは異なるものとして理解されうる。過去分詞に付け加えられる動詞「もつこと (avoir)」がそうであるように、主語の位置を占める「私 (Je)」もまた、あくまでも操作の上で必要とされるだけの形式的なものになってしまう。ちょうど、「雨が降る (Il pleut)」という表現において形式上挿入される非人称的な「彼 (Il)」のように⁽²⁴⁾。

おわりに

私たちは、日ごろ、表象を形成し、物體的に物事を同定することで認識している。本稿で考察した直説法現在形とは、こうした経験的な認識にかかわっており、実在的な時を表象するものである。すなわち、この時制は、「実在的な物理的時間に応じて、指示可能な事物の状態とかかわっている」(LS 215-216/下 21-22)のである。ドゥルーズは物体の側に名詞や形容詞を割り当てているのだが、そのことに鑑みると、直説法現在形とは、動詞の名詞的な表象と呼ぶべきものである。これに対して、本稿で取り上げた複合過去の形成にあつては、現在という実在的な時間が、アイオンとしての現在になってしまう。過去分詞は現在化されない

過去を表わすが、その非物体的な時間を表現するほどまでに、現在は形式化され、さらに、人称は非人称化される。まさに、「鏡ほどの厚さもない空虚な現在が、限りなき過去-未来を映し出す」(LS 176/上 261) ののであるが、そのとき、現在や人称は、もはや物体的な表象ではなく、「何か」と言われるしかないものの表現になってしまう。動詞というものが本来的に非物体的なものであることに鑑みれば、複合過去の形成という文法的操作によって、言語的表象は動詞的になるのである⁽²⁵⁾。

このように、言語的表象が動詞的になることで、非物体的なものがその純粹さにおいて表わされるようになる。非物体的なものは、物体の運動によって発生し表現されるが、本稿でみたのは、非物体的な仕方での表現を導く操作である。ここには、原因の「曲用」(déclinaison)ではなく、結果=効果の活用の方へとストア派の実践を展開していく『意味の論理学』の方角決定がある(cf. LS 19/上 25)。本稿では、この方向=意味の行き着く先を十分に辿ることはできないが、物体的な現在から出発して非物体的な現在を思考することの意義について、簡潔に考察して論を閉じよう。

これまで、本稿では非物体的なものの側面を論じてきたが、『意味の論理学』ではストア哲学の二元論が採られている以上、私たちはそもそも物体でしかありえない(動的発生の要点はここにあると言えるだろう)。「はじめに」でも述べたように、物体の側にとどまりながら、非物体的なものを思考することがあくまでも問題なのであり、物体的な原因性こそが、出発点であり到着点である。たとえ、「私は飲んだ」という表現が形成されるにしても、アルコールを摂取するといった物体的な原因性から出発するしかないであり、さらに言えば、そのような操作がなされるからといって、「私は酩酊している」という物体への実現がなくなるわけでもない⁽²⁶⁾。むしろ、活用とは、こうした実現や、実現を導く原因との関係で捉えられるべきなのであり、端的に言えば、物体的な原因性を非物体的な原因性で二重化する操作として理解されるべきである。

すでに述べたことではあるが、非物体的な出来事は、物体のうち実現されることで表現される。不定法の動詞が現在形に活用されるように、それとしては空虚な形式である出来事が、物体の運動において変形されつつ実現されるのである。つまり、実現による出来事の表現は、物体的な原因性なくしてはありえない。そして、ここでは、非物体的なものは、物体の運動あるいは物体的原因性にしたがうことになる(cf. LS 198/上 294)。たとえば、アルコールを摂取するという原因により、「私は酩酊している」

が実現されるのである。これに対して、『意味の論理学』では、物体的な原因性にしたがわない仕方での、非物体的な仕方での表現も論じられている。ドウルーズが念頭に置いているのは、まずもってストア派による接続詞の分析であり、たとえば「明ければ、明るくなる」といった複合命題では、異なる二つの出来事の相互的な表現がなされているとみなされる。ドウルーズは、こうしたストア派の議論の延長上でライブニッツを解釈し、相互表現しあう出来事の間を「共立可能的」とみなし、その不成立を「非共立可能的」と定式化している(cf. LS 200-201/上 297-299)。そして、このような表現関係は、物体的な原因性から区別されて、「準-原因」と呼ばれることになる。このことに鑑みれば、複合過去の形成とは、物体的な仕方での表現と、非物体的な仕方での表現を相互表現の関係に置く操作として理解できるだろう。すなわち、物体的に実現される「私は酩酊している」に、「私は飲んだ」という非物体的な表現を伴わせるのである。私たちが物体的な原因性や実現という契機から離れることはありえないにしても、結果=効果の活用は、準-原因という別の秩序をもたらすのである。

まとめよう。活用という文法的な操作において、「私」は非物体的な表現の「操作者」として、準-原因との同一化を果たす(cf. LS 171-173/上 254-257)。しかしながら、そのときにも、作用し作用される物体的な原因性から離れてしまうことはできないし、むしろ、原因の連鎖こそが表現されるべき出来事を準備している(cf. LS 172/上 256)。要するに、「準-原因は創造せずに、「操作」するのであって、到来するものを意志するだけである」(LS 172/上 256)。問題なのは、物体的な原因性の連鎖に巻き込まれて、実現されるがままに出来事を引き受けるのではなく、非物体的な原因性によって、すなわち「精神的な意志」(LS 175/上 260)によって出来事を実現へ導くことなのである⁽²⁷⁾。本稿の議論に即して言えば、「私は飲んだ」を形成することは、この表現と「私は酩酊している」という表現を両立可能なものにするのであり、ほかでもない「私が酩酊している」ことを意志することにほかならないのである。このとき、原因により紡がれる連鎖に、準-原因が介入し、新たな仕方での実現が再開するのであり、第三の現在としてのアイオーンが、瞬間という身分で、「これまで」と「これから」を分かちにくる。動詞的になることとは、非物体的な表現になることであるが、それは、経験的な物体の世界を捨て去り、非物体的なものへと上昇することではない⁽²⁸⁾。私たち、地を這うものに翼は必要ない。ただ、地上という表面に生きる術を学ぶのである⁽²⁹⁾

* ドゥルーズの著作の参照にあたっては、次の略号を用い、「原文／邦訳」の順で頁番号を指示する。なお、引用に際して邦訳がある文献はそれを参照したが、一部表現を変更したものもある。また、〔 〕内は引用者による。

LS = Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969/ ジル・ドゥルーズ『意味の論理学』上下巻、小泉義之訳、河出書房新社、2007年。

註

1. この問題に取り組む研究として、「非物体的マテリアリズム」を論じる江川隆男「出来事と自然哲学——非歴史性のストア主義について」『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』所収、月曜社、2006年がある。この論文では、「意味されるもの」と「表現可能なもの」が批判的に区別されたうえで、言語の経験的使用、表象言語が退けられ、「ドラマの言語」が論じられている（cf. 同上、189頁）。そこでは、身体からの非物体的効果（「クリュシッポス効果」）が取り上げられているのだが、本稿では、言語活動の側からの表現の可能性を模索する。
2. たとえば、次の一節を参照されたい。「このように彼らは、精神のうちにある程度それ〔非物体的な性格〕を認めたが、実在的な存在者からはそれを排除したのである」（Émile Bréhier, *La théorie des incorporels dans l'ancien stoïcisme*, Vrin, 1908, p. 12/ エミール・ブレイエ『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』江川隆男訳、月曜社、2006年、26頁）。
3. 不定法により表わされる出来事と、現在形で表される物的に実現された出来事の違いについては、たとえば第9セリーでの記述（LS 68-69/上 106）などを参照されたい。
4. 『意味の論理学』におけるギョーム受容については、拙論『『意味の論理学』における動詞と時間——ドゥルーズにおけるギョーム言語論の受容について』『フランス哲学・思想研究』第22号、2017年を参照されたい。なお、この論文の内容と、次節の記述がいくらか重なっていることを断っておきたい。
5. Cf. Gustave Guillaume, « Comment se fait un système grammatical », *Langage et science du langage*, Presses de l'Université Laval, 1964.
6. 以上については、Gustave Guillaume, « Époques et niveaux temporels dans le système de la conjugaison », *Langage et science du langage*, Presses de l'Université Laval, 1964, p. 270（以下、*Époques*と表記）を参照。
7. Cf. Gustave Guillaume, « La représentation du temps dans la langue française », *Langage et science du langage*, Presses de l'Université Laval, 1964, p. 192.（以下、*Représentation*と表記）
8. *Époques*, p. 267.
9. Cf. *Représentation*, pp. 194-196.
10. *Époques*, p. 264.
11. 朝倉季雄『新フランス文法事典』木下光一校閲、白水社、510頁、強調引用者。
12. 同上、511頁、強調引用者。
13. *Époques*, pp. 254-255.
14. *Époques*, p. 263.
15. Cf. *Époques*, p. 253.
16. Cf. *Représentation*, pp. 201-202.
17. *Époques*, p. 270.
18. 実のところ、ドゥルーズは複合過去を論じるにあたりギョームには言及していないのだが、しばしば参照がなされるエドモン・オルティグの著作では、内在相と超越相とともに、ギョームの複合過去の分析が紹介されているし（Édmond Ortigue, *Le discours et le symbole*, Editions Mouton, 1962, p. 133）、『意味の論理学』の第26セリーで参照される*Époques*においても、複合過去が論じられているため、ギョームの分析が考慮されていると考えることは不自然ではないだろう（また、第22セリーでは「avoir-eu-bu」のような複複合過去が扱われるが、これについても、ギョームが論じている）。なお、「複合過去」はフランス文部省においても直説法過去時制のひとつとみなされているのだが（cf. 朝倉季雄、前掲書、373頁）、

この点に鑑みても、ドゥルーズの複合過去は一般的なものでなく、特殊な文法理解を前提にしていると言えるだろう（また、同時代で最も影響力をもっただろうバンヴェニストは、助動詞の現在形が完了形に「変貌する」と論じており、ギヨームおよびドゥルーズの複合過去理解と異なっている（cf. エミール・バンヴェニスト『言語と主体——一般言語学の諸問題』阿部宏監訳、前島和也・川島浩一郎訳、岩波書店、2013年、第13章））。

19. *Représentation*, p. 189.
20. このことは、助動詞現在形と過去分詞から構成される受動態のことを考えればよく理解できるだろう。受動態は、過程を表すのではなく、その過程が展開された結果を表すのみである（cf. アントワヌ・メイエ『いかにして言語は変わるか——アントワヌ・メイエ文法論集』松本明子編訳、ひつじ書房、2007年、17-19頁）。
21. *Représentation*, p. 189.
22. *Époques*, p. 251.
23. 現在形のもつ本来の意味が失われることについてもメイエの議論が参考になる。メイエは、完了形などにおける現在形の動詞が助動詞になることで、avoirが「持っている」という表現的価値を失い、文法的価値を担うようになることを「文法化」として理論化している（cf. アントワヌ・メイエ、前掲書、17-19頁）。
24. 言語学的には、バンヴェニストによる人称への分析が参照できるだろうが、それとともに、ドゥルーズによるブランショへの言及を参照することもできるだろう。たとえば、出来事の実現不可能な部分とともに論じられる非人称性について、次の一節がある。「このヒト〔on〕は、日常の平凡な人とは大いに異なっている。それは、非人称的で前-個体的な特異性のヒト、雨の降るごとく死が降る純粋な出来事のヒトである」（LS 178/上 265）。
25. ドゥルーズは、ストア哲学を読みかえる仕方で、このような表現を把握する表象を「動詞的表象」（LS 286/下 124）と定式化している。動詞的表象について、初期ストア哲学の自然学の側から考察する論考として、江川隆男、前掲書を参照されたい。
26. 第三の現在が実現と相反するものではなく、むしろ共役関係にあるということについては、contre-effectuationにかんする議論を参照されたい（cf. LS 188-189/上 279-280）。この点については、拙論「出来事は必ずや実現される：『意味の論理学』における contre-effectuation 概念再考」『フランス哲学・思想研究』第24号、2019年も参照されたい。
27. 当時のストア派の人びとは「意志」という概念をもたなかったが、ドゥルーズの議論とは親和的に思える。たとえば、マルクス・アウレリウスの次の一節がある。「〔君の魂の〕支配的部分とは、己を目覚めさせ、わが方向を定め、意のままに己を形づくり、また、すべての出来事を自分の望みどおりの姿に、自分の眼に映じさせる、そういう部分である」（マルクス・アウレリウス『自省録』鈴木照雄訳、『世界の名著 13 キケロ エピクテトス マルクス・アウレリウス』所収、1968年、第六巻第八節）。この点については、出来事を捉える表象と表象の様態としての意志の内的な関係から解釈して、意志された出来事だけが実現するのだと理解することができる（cf. André-Jean Voelke, *L'idée de volonté dans le stoïcisme*, PUF, 1973, p. 45）。しかしながら、魂も物体とみなすストア哲学は、このような意志も原因として捉えるため、物体には還元されない精神的な意志を論じる『意味の論理学』とは根本的な態度を異にしている。
28. エミール・ブレイエは、物体ではなく非物体的なものを志向する態度を「グノーシス主義」になぞらえ、物体にこそ重要性を見いだしていたストア派との相違を強調しているが（cf. Émile Bréhier, *op. cit.*, pp. 51-52/ エミール・ブレイエ、前掲書、85-86頁）、ドゥルーズは、物体とともに非物体的なものに賭け金を置く点で対照的である。こうした『意味の論理学』の態度については、拙論「ドゥルーズ『意味の論理学』における自由と実現主義について」『hyphen』第2号、2017年も参照されたい。
29. ドゥルーズは、ストア派に固有の哲学的なイメージを説明するにあたり、「大地の測量士」（LS 157/上 233）としてのヘラクレスを持ちだしている。これと同様に、『意味の論理学』の随所に見られるキリストにかんするモチーフにも着目されたい。たとえば、すでに言及してきた「受肉（incarnation）」に加え、静的発生にかんして言われる「穢れなき御宿り（immaculée conception）」（LS 118/上 177; 149/上 220）や、一義性について用いられる「〔御言葉＝御子〕（Verbe）」（LS 216/下 22）などがある。これらの語法に鑑みて、地上にもたらされた恩寵という論点について考察する余地があるように思われる。